

# 大古墳展 展示解説シート

～越辺川中流域の古墳文化～

## 1 古墳時代の幕開け

弥生時代後期（3世紀後半頃）の越辺川中流域では、これまで活動が低調だった地域へ人々が新たに進出していくようになります。毛呂台地上に三福寺遺跡などの集落が点在し、低地では、未開地「フロンティア」に進出した人々によって開かれた広大な耕作地を背景に、下田遺跡で大規模な拠点集落が形成されます。

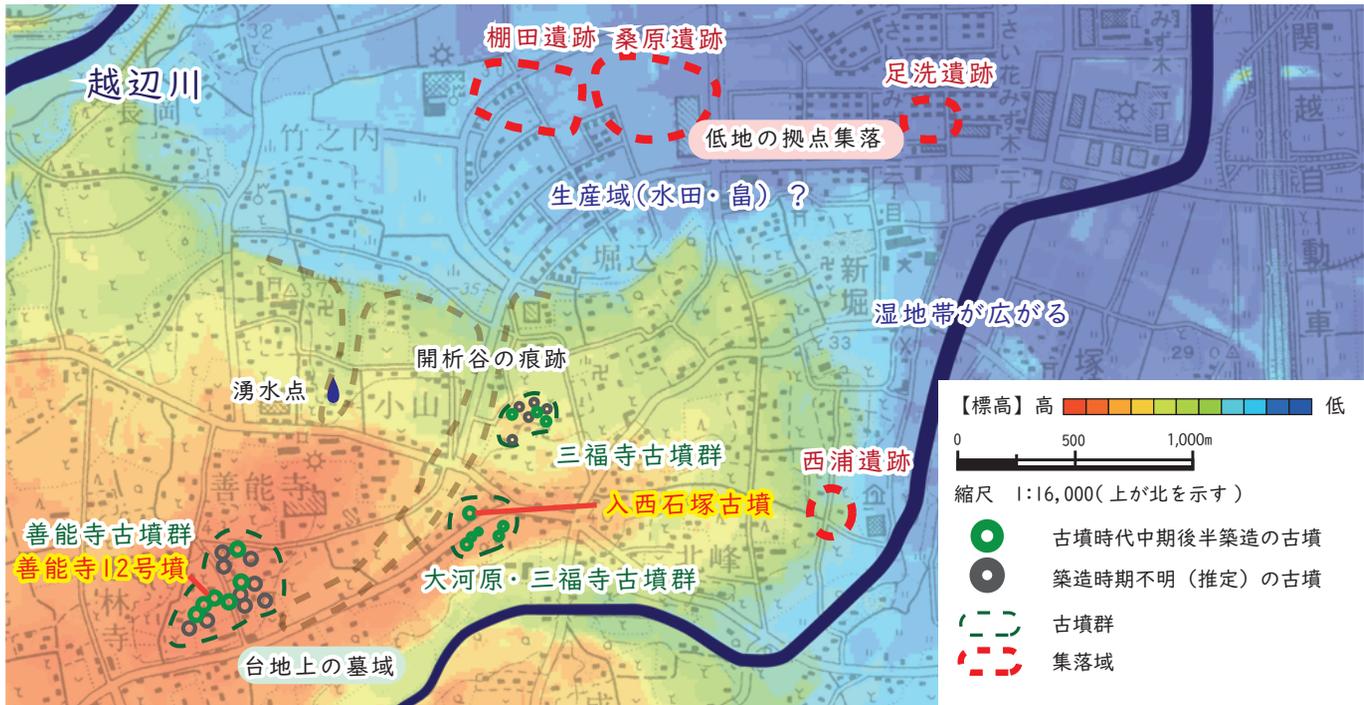
古墳時代初頭には、毛呂台地の縁辺部の大河原遺跡、長岡遺跡、低地の中耕遺跡、稲荷前遺跡などで集落が形成され、低地進出が本格化する傾向も見て取れます。

彼らの墓域として、中耕遺跡や広面遺跡では方形周溝墓群が発見されています。

※方形周溝墓

四角い低墳丘の周囲を溝で囲んだ墓で、中央部に埋葬施設を伴う。

## 2 古墳時代中期後半の開発



地理院地図および国土地理院発行2.5万分の1地形図「川越北部」「越生」をもとに作成

古墳時代前期に形成された集落や墓域は、古墳時代中期（4世紀）までには衰退し、越辺川中流域で再び人々の活動が活発になるのは中期後半（5世紀後半）になります。低地帯の桑原遺跡と棚田遺跡に大規模な集落が形成されます。集落の眼下に広がる湿地には、水田などの耕作地が広がっていたと考えられます。これら地域開発は、新興集団の指導者（在地首長層）によってけん引されました。

### 3 初期群集墳

労働力と新たな土木技術を導入し、地域開発を成功に導いた首長たちの奥津城おくつき（墓域）として、台地上に多くの古墳が築造されました。

古墳時代中期から後期前半ころまでに形成された高密度の古墳群を「初期群集墳ふん」といいます。越辺川中流域では、中期後半（5世紀後半）頃から善能寺古墳群ぜんのうじ、大河原古墳群おおがわら、三福寺古墳群さんぷくじで古墳の築造が始まります。

古墳群はいずれも、集落のあった棚田遺跡たなだ、桑原遺跡くわばらから南側に深く入り込む谷の周囲に形成されており、谷を中心とした周囲の高台が古墳の築造場所として選地された様子が見て取れます。

三福寺古墳群では3号墳と6号墳が中期後半に築造されたものとみられ、3号墳では、円筒埴輪とともに馬や人物などの形象埴輪も多数出土しています。

### 4・5 善能寺古墳群

善能寺古墳群ぜんのうじは毛呂台地中央部に深く入り込んだ埋没谷まいぼつだにの最奥部さいおうぶに位置しています。毛呂台地上でも比較的標高が高く、居住域としては不適なこの高台が選地されたとみられます。

善能寺5号墳は、古墳時代中期後半（5世紀後半）の築造とみられる直径約20mの円墳です。墳丘へのちくぞう葺石えんぷんと、円筒埴輪ふんきゅうの樹立が認められ、過去の調査で※ふきいし葺石と、円筒埴輪の樹立が認められ、過去の調査では、埋葬施設から大刀と剣各1振が発見されました。

善能寺12号墳は、直径約20mの円墳で、周溝が二重に巡ります。外周溝からは大量の円筒埴輪が出土しました。

円筒埴輪の外面には、横方向のハケ調整が施されており、中期後半でも古い段階の古墳とみられます。

12号墳の被葬者ひそうしゃは、地域開発を成功に導いた有力者の一人とみられます。

※ 葺石：墳丘の表面を覆うように葺かれた石



5号墳の周溝脇から発見された埴輪棺墓



12号墳全景



12号墳出土円筒埴輪 1/10

## 6 初期群集墳(大河原古墳群)

おおがわら もろだいち くずかわ か  
大河原古墳群は毛呂台地南側を流れる葛川の河  
がんだんきゅう  
岸段丘上に立地し、帯状の高台に古墳群が展開し  
ています。

ぜんのうじ はにわ じゅりつ  
善能寺古墳群のような埴輪の樹立は見られない  
のがこの古墳群の特徴です。また、しゅうこう  
周溝内から多  
数の土器が発見されており、土器を使用した葬送  
ぎらい と  
儀礼が執り行われていたようです。使用される土  
器にはひき いるま せきしよくがんりょう とふ すえき つきふた  
比企・人間地域特有の赤色顔料が塗布された赤い土器と、須恵器の坏蓋  
を模倣した無彩の土器が使用されており、使用された土器の組合せには集団内  
でも差異が見られます。



1号墳 舟形木棺跡

えんぷん たてあなけい まいそうしせつ ひつぎ はくしよくねんど  
1号墳は直径約23mの円墳で、竪穴系の埋葬施設から棺を固定した白色粘土  
がふながたもっかん  
良好な状態で検出され、「舟形木棺」(船のような形をした棺)が安置されて  
いたことが明らかとなりました。

## 7 入西石塚古墳副葬品の発見

にっさいいしづかこふん さんぶくじ もろ  
入西石塚古墳(三福寺1号墳)は、坂戸市西部の毛呂台地に位置する古墳で、  
昭和31年頃に土地所有者によって墳丘が掘られ、武器や武具、鏡などの豊富な  
ふくそうひん  
副葬品が偶然にも発見されました。そして、昭和37～38年頃、かがみ  
鏡以外の副葬品  
を袋に入れ敷地内に丁寧に埋納したことが伝わっています。

その後、坂戸市教育委員会では、平成26年度から専門家と合同で調査を行い、  
副葬品の内容が明らかとなりました。また、平成27～28年度に武器・武具のク  
リーニングや保存処理を実施しました。

その後、鏡の所有者より鏡2面を市へ寄贈いただき、令和2年3月26日に「入  
西石塚古墳出土遺物一式」として市指定有形文化財に登録されました。

## 入西石塚古墳の副葬品

武器等：<sup>たち</sup>大刀・<sup>だこうけん</sup>蛇行剣・<sup>けん</sup>剣・<sup>ほこ</sup>鉾・<sup>てつぞく</sup>鉄鍬・<sup>とうす</sup>刀子

武具：<sup>かぶと</sup>冑・<sup>いたしころ</sup>板鍬・<sup>たんこう</sup>短甲・<sup>あかべよろい</sup>頸甲・<sup>かたよろい</sup>肩甲

鏡：<sup>しゅもんきょう</sup>珠紋鏡・<sup>しにゅうくかくもんきょう</sup>四乳区画紋鏡

これらの副葬品は、形態の特徴などから古墳時代中期後半（5世紀後半）に製作されたと考えられます。

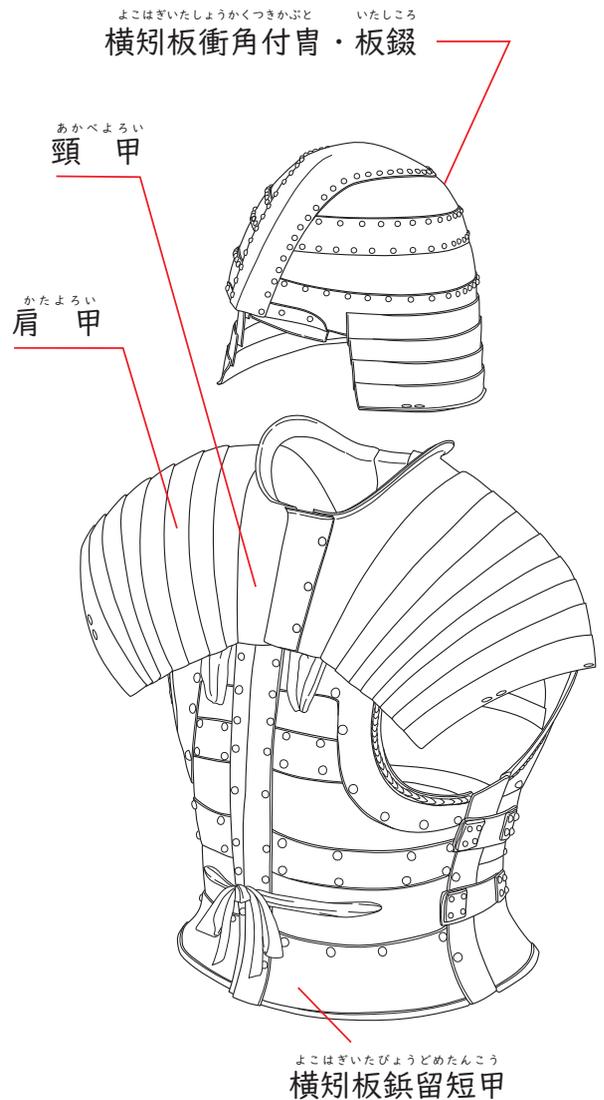
## 入西石塚古墳の評価

出土品の調査によって、<sup>につさいいしづかこふん</sup>入西石塚古墳は古墳時代中期後半（5世紀後半）の古墳であることが分かりました。

古墳時代中期後半は<sup>おっぺがわ</sup>越辺川中流域の再開発が始まる時期にもあたり、入西石塚古墳に埋葬された人物は、この地域の開発を推し進めた有力者（<sup>ざいちしゅちょう</sup>在地首長）の一人と見られます。

また、多彩な武器や武具を所有していることなどから、ある時期には、「武人」としてヤマト王権に仕え、軍事的役割を担っていたのかも知れません。

入西石塚古墳出土品は、<sup>きな</sup>畿内のヤマト王権と地域社会の関わりを示す、学術的にも大変貴重な資料といえます。



珠紋鏡（右）と四乳区画紋鏡（左）

## 入西石塚古墳のここがすごい

- ・冑や短甲などの武具がセットで出土した **埼玉県内初の発見**
- ・大刀に両面2箇所ずつ刻まれていた円形文様の発見 **全国初の発見**
- ・「蛇行剣」の発見 **埼玉県内2例目**
- ・小型鏡2面を所有

## 8 開発拡大と新興集落の出現

古墳時代後期（6世紀）になると、越辺川中流域で未開拓だった土地にも開発の波が及び、台地縁辺部の塚の越遺跡や大河原遺跡、長岡遺跡などの新興集落が出現します。沼端遺跡のような低地でも集落が確認されており、いまだ未発見の集落が低地帯に眠っている可能性も想定されます。

集落域の拡大に対応するように、毛呂台地一帯での古墳築造も一層活発化します。毛呂台地西部の半島状に突き出た高台では、6世紀から長岡遺跡、塚原遺跡、花見塚遺跡などの集落が成立、急成長します。集落の南側に広がる苦林古墳群では、前方後円墳が相次いで築造されており、この地域に強固な生産基盤が存在していたことを物語っています。

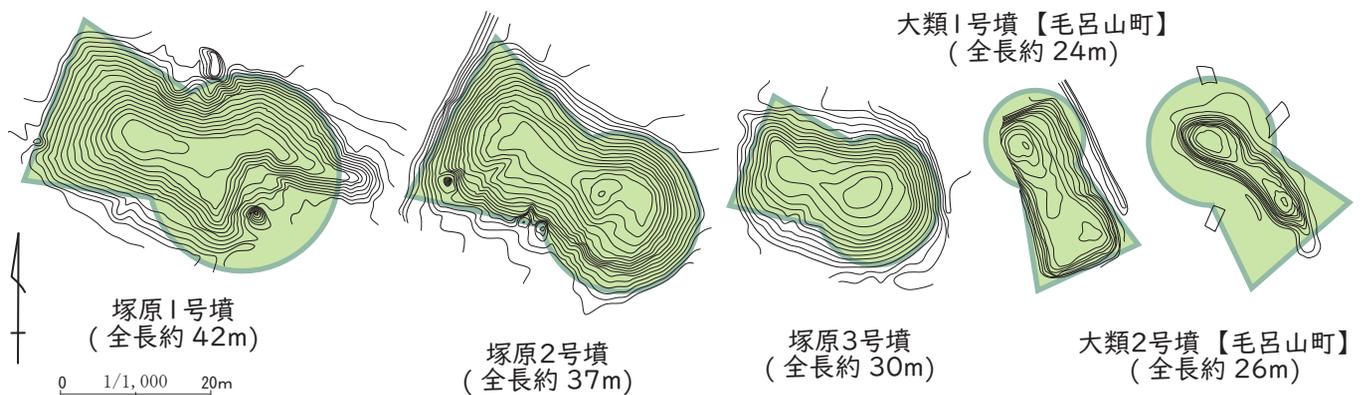
## 9 前方後円墳の出現

古墳時代後期（6世紀）の越辺川中流域では、生産力の向上を背景に、中小規模の前方後円墳が相次いで築造されます。

古墳時代後期から開発の始まった台地西部でも古墳築造が始まり、越辺川の河岸段丘上に塚原古墳群と毛呂山町大類古墳群（両古墳群を総称として苦林古墳群とも呼ばれる）が形成されます。

苦林古墳群では、6世紀後半以降に前方後円墳5基が相次いで築造されます。前方後円墳が密集して現存する県内の事例は少なく、市内屈指の保存状態を誇る古墳群と言えます。

### 苦林古墳群中の前方後円墳



## 10 形象埴輪の時代 (1)

古墳時代後期（6世紀）の越辺川中流域では、人物や動物などをかたどった  
けいしょうはにわ じゅりつ さいせいき  
形象埴輪の古墳への樹立が最盛期を迎えます。

もろ ぜんぼうこうえんぶん つか こし さんぶくじ  
毛呂台地中部では、6世紀後半に前方後円墳「塚の越1号墳」（三福寺2号墳）  
ちくぞう たくちぞうせい ぜんぼうぶ しゅうこう  
が築造されます。塚の越1号墳は、宅地造成に伴う発掘調査で前方部の周溝  
じんぶつはにわ  
が発見され、人物埴輪を含む多くの埴輪が出土しました。

ざいちしゅちょう  
塚の越1号墳は地域開発を率いた在地首長の墓とみられます。

## 11 形象埴輪の時代 (2)

もろ  
毛呂台地西部では、古墳時代後期（6世紀前  
きたみね ちくぞう  
半）から北峰古墳群が古墳の築造を開始します。  
ほたてかいしき  
令和5年度現在で、帆立貝式古墳1基（北峰31  
号墳）を含む44基の古墳が発見されています。

6世紀に築造された古墳の多くには円筒埴輪  
じんぶつはにわ うまがたはにわ  
の樹立が認められ、人物埴輪や馬型埴輪などの  
けいしょうはにわ  
形象埴輪の存在が確認された古墳も数多く発見  
されています。これら、埴輪の製作地について  
ひがしまつやまし さくらやまようせき  
は、東松山市にある桜山窯跡であることが明らか  
になっています。



北峰古墳群



※帆立貝式古墳：円形の墳丘に小さな方形の張り出し部がついた古墳。前方後円墳と同じような形をしているが、前方部が著しく短い。

## 12 再開発と律令国家の胎動

古墳時代終末期（7世紀）になると、ながおか  
長岡遺跡のように前段階から継続する伝  
いなりまえ しんこうしゅうらく  
統的な集落と、稲荷前遺跡のような低地の新興集落が出現します。これらの集落  
れんめん りつりょうこっか  
は奈良時代（8世紀）以降も連綿と継続するのが特徴であり、律令国家成立を見  
据えた地域の再開発によって生まれた集落と言えます。

おっぺがわ ひききゅうりょう みなみひきようせきぐん ほと  
7世紀後半になると、越辺川対岸の比企丘陵の開発が本格化し南比企窯跡群（鳩  
やままち らんざんまち まち すえき  
山町・嵐山町・ときがわ町）で須恵器や瓦の生産が始まります。この比企丘陵の  
開拓にも、越辺川中流域の集団の関与があったとみられます。

## 13終末期群集墳と大型古墳

台地上では大規模集落の形成と連動するように、古墳築造がピークを迎えます。各古墳群は拡大を続け、これまで人々の活動が低調だった成願寺地区や越辺川の対岸でも次々と古墳が造られるようになります。

成願寺古墳群では首長墓として50m超えの大規模円墳である2号墳（石上神社古墳）築造されます。

大型円墳が築造される一方、各古墳群では小規模円墳が密集した「終末期群集墳」が形成されます。

墳丘の規模や形、副葬品のバラエティなどから、終末期には古墳に葬られる人々の階層が拡大し、より多様化している様子がみとれます。

越辺川中流域での古墳築造は7世紀末頃を最後に終焉を迎え、新たな時代に入っていきます。

### 用語解説

展示見学中にご質問やご不明な点がございましたら、会場内係員にお声がけください。



#### 【竪穴建物（たてあなたてももの）】

地面に掘られた竪穴の上に屋根を葺く半地下式の建物。「竪穴式住居」とも言われる。居住用だけでなく、工房や作業場などの目的でも使用される。

#### 【掘立柱建物（ほったてばしらたてももの）】

柱穴に柱を据えて建てる建物。柱の配置で建物構造や規模、用途などを推測することができる。

#### 【土坑（どこう）】

地面に人為的に掘られた穴。目的や時代などによって形状や大きさは異なる。

#### 【土師器（はじき）】

古墳時代以降に作られた素焼きの焼き物。焼き上がりは赤褐色や黄橙色となる。

#### 【須恵器（すえき）】

古墳時代に朝鮮半島から伝来した硬質の焼きもの。ロクロで成形され、登り窯を用いて焼成する。焼き上がりは青灰色や灰色を成る。

#### 【かわらけ】

中世につくられた素焼きで皿状のやきもの。

#### 【坏（つき）・高坏・埴（わん）】

皿よりやや深い器。高坏は坏に脚がついたもの。埴は坏より深い半球状の器

#### 【甑（こしき）】

調理具の一種。煮沸具である甕の上に設置し、蒸気を利用して食材を蒸す。

#### 【勾玉（まがたま）】

装身具や祭祀具の一種で、記号のコンマ（,）に似た形をしている。朝鮮半島でも多く発見されている。

# 関連年表

